

それがある日の放課後。ノートを集めて持ってくるように言われた花が教料準備室に入ると、当の先生は机に頭を乗せて眠ってしまったていて。

その見た事の無い無防備な姿に、ドキリと胸が騒ぎ出す。

机の上に肘を乗せて、そこに頭を乗せるようにしているその横顔が、放課後の夕陽を受けて陰影を際立たせている。思いの外長い睫毛が頬に影を落として、その整った顔を彩っている。

(…やっぱり格好いいな)

思わずじつと見つめてしまう。

この恋が叶ったら、一体どんな気持ちだろう。毎日先生の姿を見ただけでドキドキと胸が騒いで、落ち着かない気にさせられるのだろうか。

そう思つて、ふと気づく。それは今も同じなのだから、変わらないのではないか。何しろ、今までに好きな人もいなかった花としては、初めて好きになったのが先生なのだから、どうなつてしまふのかも分からないのだ。

(まあ、叶わないのは分かつてるんだけど…)

先生と生徒の恋なんて、許されるわけがない。それでも募る想いは止める事など出来ない位に、膨らんでしまつていく。

「…先生、好き」

寝ているのを良いこと小さな声でそう呟いて、そつとその髪に触れてみる。硬そうに見えた黒髪は、思いの外柔らかく花の指に絡んだ。

(あ、思つたよりも柔らかいんだ…)

思いがけない事を知つた喜びに、浮かれた気持ちになる。きっと、こんな事は他の誰も知らない。そう思うと、幾ばくかの優越感が花の胸を満たした。

さてこれからどうしたら良いのだろう。

ノートを集めて持ってきたはいいが、当の本人は夢の中だ。確か、部活の顧問も持っていた筈だったから疲れているのだろう、きつと。

そう思うと、寝ている人をわざわざ起こす事なんて出来ない。取りあえず机の上に、集めたノートを置く。せめて、何かメモでも置いていくべきだろうかと、メモ用紙を探そうと側を離れた瞬間。何かが花の手を引いた。

あつと思う間もなく、今の今まで寝ていたと思つた先生が花の腰を抱き寄せている。しかも、背中にまで手を回している周到さだ。あまりにも突然すぎて、自分の身に何が起こつたのか理解が追いつかない。

「…俺の寝込みを襲いに来たんじゃないのか？」

「私、そんな事しません…！」

そんな低い囁きが、耳朶を打つ。

よりによつて、寝込みを襲うとか何を言い出すのか、である。

「そうか？さつき熱烈な告白を聞いた気がしたんだが？」

「…先生起きて…？！？！？！？」

笑い含みの声に、急激に恥ずかしさが花を襲う。腕の中から逃れようともがく花を、逃さないとしても言うように、抱きしめる腕が強くなる。

「…俺もだ」

「え？」

「ずつとお前が好きだった」

「っ？！」

逃れようともがいていた身体が、その言葉でびたりと止まる。

だつて、そんなの信じられる訳がない。

緩まつた腕の中で、そつと先生を見上げる。その顔は今まで見たことのあるどの顔よりも、優しげで。

トクン、と胸が音を立てた。

こんな顔は知らない。まるで、普通の男の人みたいなそんな。